フランスから見た一九九九年六月EU議会選挙

土 倉 莞 爾

一

本稿は一九九九年六月に行われたEU議会選挙を主としてフランスの情勢を中心として分析しようとするものである。本論に入る前に、EU議会選挙を前にした「ヨーロッパ政治の動向」を明らかにするためにフランス政治の文脈からそれまでの経緯と問題点を説明しておきたい。⁽¹⁾

EU議会選挙はフランス政治の中で大統領選挙とか国民議会選挙とは異なった趣を呈している。しかし、フランス政治の一断面を垣間見させてくれるのも事実である。ジョスパン Jospin 内閣が成立したのは一九九七年であるが、その遠因は一九九五年の大統領選挙にある。この大統領選挙で勝利したのはシラク Chirac であるが、彼の勝利した理由のひとつとしては「所得格差の縮小」を訴えたところにあった。しかし、いったん大統領になると、選挙民の期待にもかかわらず、シラクは首相のジュペ Juppé とともに国民に犠牲を説くような方向転換を行う。ジュペはテクノクラートであり、彼の政策は専門家にしか理解できないと言われていた。ヨーロッパ統合にとって大事な通貨統合

に参加するためにジュベは緊縮政策を取った。マーストリヒト条約が掲げる、財政赤字を国内総生産の三%に収めるという参加基準は、EU官僚が作ったものである。それが何時の間にか数字だけが一人歩きをして、ジュベ内閣は帳尻を合わせるために、公務員を削減し、社会保障費をカットした(『日本経済新聞』九七・六・五)。そんなやり方はうまくゆかなかった。ジュベの言うように「あまりにも多くのことを、あまりにも短い期間に行おうとした」(『ニューズウィーク』九七・六・一一)ために失敗が出てくる。

フランスの国民議会選挙は五年ごとに行われることになっている。前回は一九九三年だったから、次回は一九九八年にやればよかった。シラクとしては、EU統合を目指して、通貨統合にスムーズに参加するために、本来ならば国民議会を解散する必要はなかったのに、解散を早めて、国民の信を問うことによって、通貨統合に有利な条件を作らなかった。そこで、一九九七年五月、国民議会を解散した。しかし、それが裏目に出て、国民議会選挙で惨敗した。ジョスパンは、一九九五年の大統領選挙では、社会党の人材難から彼が大統領候補となり善戦したが、今度も受身の選挙となった。しかし、ジョスパンは、彼の清潔さ、誠実さのようなものを訴えて、今度は社会党の圧倒的な勝利をもたらすことになった。選挙期間中、選挙民にとってもっとも重要に見えたのは失業、社会的保護、不平等、教育といった社会的懸念材料であった。経済の近代化に必要な問題、財政赤字に対する戦い、ヨーロッパの統合、世界におけるフランスの地位といった問題は訴えても効果のないテーマだった。そしてこの懸念材料を解決するのはRPRやUDFではなくて社会党だと思われた。選挙民は経済競争だけでなく「規制の緩和」、⁽²⁾「緊縮財政なきヨーロッパ」、

「現社会モデルを検討することのない変化」を求めたのであり、それは社会党の政策の中心をなすものだった。ただ、ジョスパンが訴えた政策、あるいは選挙民がジョスパンに期待したものは何であったかという点は、かなり

難しい問題である。すなわち、シラクが、公約では社会保障を充実すると言いながら、大統領に当選した暁には掌を返すようなことをして、急に解散を言ったりするものだから、選挙民としては不満が募るわけである。それがジョスパンを勝たせたとも言えた。したがって、シラクに「待った」をかけたジョスパンが首相になって、大統領と正反対の方向に行くのではないか、という心配もあった。事実、当時、日本の新聞の論調は「これでヨーロッパ統合はきしむのではないか」というトーンであったと思われる。

だが、ジョスパンは、選挙で言ったことと実行することは別だと割り切った。また、コアピタシオンで、もう一方の行政のコアである大統領を尊重した。ヨーロッパ通貨統合に消極的な共産党閣僚の入閣にしても、ジョスパン内閣にとって、共産党は手ごわい労組を抑えるうえで頼もしい味方である。「九五年十二月、鉄道労組のストでフランス全土がマヒしたような事態は、二度と繰り返したくない」という思惑があった（『ニューズウィーク』、九七・六・十七）。結局、「ジョスパンの方法」⁽³⁾としては、さまざまな意見を調整して、正論を述べ、たえずバランスを取ってゆくことにあった。そして、共産党、緑の党、シューヴェヌマン Chevenement の市民民主運動の人たちも入閣させることによって、反シラクの「多元的左翼」を構築する連立内閣とすることにジョスパンの狙いがあった。ポピュリスティックな言葉を操る指導者は権力の座につくと統治理性に戻ってゆく⁽⁴⁾、という見方もある。

ルベン Le Pen 現象について言及しておきたい。一九九七年の国民議会選挙の第一回投票で FN は得票率が十五％を突破した。フランス本国の得票数では、UDF の三六八万を凌駕して、RPR の四〇八万に迫る、三七七万票を獲得したことが重要である。続く、第二回投票でも FN が勢力を維持したことは、穏健右翼の敗北の大きな要因のひとつとなり、自分たちの権力にしがみつく穏健右翼の有力者たちに「さしのべられた手」によって、一九九八年の地方

選挙で、極右は路頭に迷った穏健右翼の「買い付け」、すなわち乗っ取りに成功しつつあるとまで思わせるにいたった。破裂とアイデンティティ危機のさなかにある穏健右翼に対し、FNは権力の座にかんばかりの印象をあたえることさえできた⁽⁵⁾。当時のRPR幹事長、ジャンフランソワ・マンセル Jean-François Mancel は「FNの支持者は、孤立させずに取り込まなければならぬ。治安問題や不法移民問題に、われわれも対応できるということを示す必要がある」と述べた。これに対して、当時、FNナンバー二のブルーノ・メグレ Bruno Mégret は「われわれの考えが、多数派になった証拠だ。草創期と全国政治への参入期を経て、FNは第三段階の成熟期に入った。今やわれわれには統治能力がある」と豪語した(『ニューズウィーク』一九九七・四・九)。付言すれば、マンセルは一九九八年の地方選挙後、FNの支援を受けてオワーズ Oise 県の県議会議長となり、RPRを除名された⁽⁶⁾。

けれどもFNは分裂する。FN党首ルベンが一時は後継者と目されたメグレを切った。メグレは、それまで、穏健右翼を分断し、より大きな極右勢力の結集をめざしてきた。ただメグレは、新勢力の中心的指導者をルベンとは想定していなかった。「私は剣を抜き、やられる前にブルータスを殺す」とルベンは言った。一方のメグレは、党の地方幹部の過半数は自分を支持していると主張した(『ニューズウィーク』一九九八・十二・二三)。メグレのルベンへの反旗は、FNがルベン抜きで選挙を戦えるだけの實力をつけ、ヴィトロール市での勝利、ストラスブル大会での成功、その後の地域圏議会選挙での勝利で、メグレがルベンに取って代わる正統性を確立したという自信があった。結局、一九九九年一月二四日、マリヤヌ Margnane 市の体育館に二千名が集まり、メグレ派の分裂党大会が開催され、FNの分裂は完成される⁽⁷⁾。

ここで、前回の一九九四年EU議会選挙について、フランス政治を切り口として、若干述べてみたい。「ヨーロッ

パは特権者の特権となった」とフランスの政治学者ロラン・ケイロル Roland Cayrol はのべたことがある。マーストリヒト条約批准のフランスの国民投票はそのことを明らかにした。ただ、教育の水準によってヨーロッパへの態度は形成されるし、ヨーロッパ建設に好意的なのは管理者層で労働者層はそうではない、というのはEU諸国どの国にも認められる現象である。⁽⁸⁾ 九四年EU議会選挙は、社会党のミッテランが大統領で、RPRのバラデュール Balladur が首相であったこと、また一年後に大統領選挙を控えていたこと、あるいは一九九二年マーストリヒト条約批准の国民投票の二年後であることなどがポイントである。EU議会選挙は比例代表制で選出されるから、いろいろな党派の出馬が可能である。しかもそれぞれの党派は候補者リストを提出するが、誰をリストのトップに掲げるか興味深いものとなる。

面白いのは、RPRとUDFといった議会与党が、この九四年のEU議会選挙で統一リストを作ったことである。しかも、その統一リストに、ジュベとか、レオタール Leonard といった大物政治家は載らない。もちろん、ジスカール Giscard もシラクも載らない。ドミニイク・ボーデイス Dominique Baudis というトゥールーズ市長だったマスコミでも名が売っていたキリスト教民主主義者の候補者がリストのトップに立った。これは、翌年の大統領選挙を控えて、まだ名乗りをあげてはいなかったが、候補者の一人、当時の首相バラデュールと、すでに過去二回大統領選挙に立候補した経験があり今回も表明済みのシラクとの暗闘が影響していた。また穏健右翼内部のヨーロッパ統合懐疑派にも配慮しなければならなかった。結局、ボーデイスのリストは妥協の産物だった。大統領選挙には触れない静かなEU議会選挙運動となった。それでも、穏健右翼内部からフィリップ・ド・ヴィリエ Philippe de Villiers の反ヨーロッパのリストが出現するのを防ぐことは出来なかった。⁽⁹⁾ 右翼多数派(ボーデイスとド・ヴィリエ)のリストの

得票率の総計を見るならば、一九九三年三月の国民議会選挙における、RPR、UDFをはじめとする穏健右翼の記録よりはるかに降下していることがわかる。一九九三年には四四・四%だったが、一九九四年には三七・九%であった。つまり、九三年の国民議会選挙より十五ヵ月後のEU議会選挙においてRPRとUDFは彼らの潜在的力量の八五%しか発揮できなかったということになる⁽¹⁰⁾。

社会党はミシェル・ロカール Michel Rocard がリストのトップになった。ロカールは新しく社会党の指導者になったばかりであり、一九九五年の大統領選挙の希望ある候補者でもあった。彼は、EU議会選挙を、社会党における自分の権威と、国内における社会党の立場の強化に利用しようと考えていた。一九九四年三月の県議会選挙で社会党は二三%の得票率で好調だった⁽¹¹⁾。

ところで、このEU議会選挙には二十あまりの様々なリストが提出された。まず、シラクのRPRであるが、例えば、フィリップ・セガン Philippe Seguin とかシャルル・パスクワ Charles Pasqua といった人たちはヨーロッパ統合をそれほど支持しない。UDFから出たド・ヴィリエという反ヨーロッパ統合派の候補者のリストが多数得票するという結果が生じた。左翼では、ベルナル・タピ Bernard Tapie という実業家が、急進党行動派といったリストを作った。これはミッテランの暗黙の支持によるものであったが、左翼急進派(MRG)では急進主義を裏切るものとして反対も多かったものであった⁽¹²⁾。結果的には、与党連合ボーデイスのリストが二八名、社会党ロカールのリストが十五名、ド・ヴィリエのリストが十三名、タピのリストが十三名当選させたことになった。

ここで、この選挙のいくつかの問題点を指摘すれば、タピが立候補することによって、ド・ヴィリエやFNなどの反ヨーロッパ統合派の人たちよりもタピが多数の票を集めたことによって、ヨーロッパ統合支持者の票が増加したこ

とである。一九九四年六月一日のタピ対ルベンのテレビ政治討論はポピュリスト同士のイデオロギー対決として世間の注目を集めた。タピの勝利は、左翼の壊滅を救っただけでなく、親ヨーロッパ派をも救った。⁽¹³⁾ また、ベルナル・アンリ・レヴィ Bernard-Henri Lévy と「新哲学者たち」《Nouveaux philosophes》の一人がボスニア問題を提起するために、サラエボ・リストを掲げ、立候補を宣言した。ロカールはそれを取り込もうとして、レヴィは立候補を取り下げたが、それがミッテランの逆鱗に触れ、ミッテランはタピを応援した。ミッテランに近い社会党の幹部はロカールを支持しなくなった。サラエボ・リストは前大臣のレオン・シュワルツェンベルグ Léon Schwartzenberg が継承した。⁽¹⁴⁾ 六月十二日の投票日の一週間前、ロカールは選挙後の「新しい連合」を提案した。しかし、それは一週間後の選挙での敗北を認めるものであり、六月十二日の選挙は重要ではないということになる。⁽¹⁵⁾ ロカールは一九九三年総選挙の際も「ビッグ・バン」発言を行い失敗したことがある。⁽¹⁶⁾ 事実、社会党は敗れた。社会党は一九八四年のEC議会選挙では二十%以上の得票率をあげた。一九八九年には二三%だった。一九九四年EU議会選挙におけるロカールの目標は、予想以上の得票率を獲得して、社会党内の指導者の位置を不動のものにしたいということだった。⁽¹⁷⁾ 結果は十四・五%だった。敗北の後、ロカールは社会党のリーダーを去ることになった。

前回の一九八九年EU議会選挙から一九九四年の選挙にかけて、左翼の得票率の増加は、タピのリストが達成したおかげだった。しかし、タピの躍進は左翼票の分解をも惹き起こした。一九九四年のEU議会選挙で左翼は三極のブロックに分解した。共産党、シューヴェヌマン派、極左の極が十二・一%、社会党の極が十四・五%、タピ支持者の極が十二・〇%である。⁽¹⁸⁾ 支持基盤から見ればタピ支持者は急進党の伝統、プロヴァンス地方の特異性、社会的抗議の独特な混合である。⁽¹⁹⁾

散乱の中で苦心の末、再建を果たそうとする左翼と、消失しそうな環境保護派に対して、右翼は、一九九四年のEU議会選挙で、多数派とはなったが停滞していた。右翼は、一九八九年のEC議会選挙では四九・一六%であったが、一九九四年では四八・四四%に留まった。一九九三年の国民議会選挙に較べると、八ポイントも下落している。すなわち、九三年国民議会選挙では五六・八八%であるが、一九九四年EU議会選挙では四八・四四%である。この下落にもかかわらず、右翼は、左翼におよそ十ポイントの優勢を示している。すなわち、四八・四四%対三八・六六%である。しかしながら、多数派右翼も選挙では三つのブロックに分解する。すなわち、ボーデイスのRPR—UDFリスト(二五・五八%)、ド・ヴィリエの異端派(十二・三四%)、極右ルペン(一〇・五二%)である。⁽²⁰⁾

この選挙では、女性の立候補者が多かったのも特色であった。この選挙が国内選挙ではなかったために、それに対する政党の抵抗が少なかったことも一因である。だが、EU議会選挙によって、女性の存在は平凡ではあるが広範であるがゆえに、フランス政治における女性の重要性の様変わりを示したことも事実であった。⁽²¹⁾ ジョスパンはそれを見習って一九九七年の国民議会選挙で女性候補者を多く立候補させ成功したことも忘れてはならない。結局、EU議会選挙は、フランスにおいて重要な役割を演じている。一九七九年にはシラク派の形成、一九八四年にはFNの登場、一九八九年には環境派の出現、という具合である。このように見るならば、一九九四年は、急進党以来の変貌したMRGの現出、ド・ヴィリエによって組織された穏健右翼異端派の登場と見ることができる。⁽²²⁾

以上述べたことをふまえて、今回の一九九九年EU議会選挙当時における問題点を、フランス政治の文脈からの総括として試みておこう。

第一に、フランスの政治学者パスカル・ペリノーの言うように、左右の対立軸を超えて、今、どの国の社会にも開

かれた社会と閉ざされた社会の間の対立が確立されつつある、という点である。すでに、一九九二年、マーストリヒト条約の国民投票の際に現れた賛成と反対の対立は、左右の対立軸ではまったく捉えられなかった。ヨーロッパをめぐる対立軸は左と右を完全に解体し、開かれた社会と閉ざされた社会のそれぞれの支持者を正面から対立させた。²³ たしかに、これに大きく関係するFNは分裂したが、この問題は極右だけの問題ではないし、この観念は政治勢力の問題だけにとどまらないといえよう。

第二に、それに関連するが、フランスはヨーロッパになれるか、という問題がある。全体的な大問題であるが、ある側面についてだけ指摘することにする。一九九九年三月十六日、EUの政策を執行するEU委員会がサンテール委員長を含む二十人のEU委員の総辞職を決めた。予算執行に当たって、親しい企業や知人と特別な契約を結んで利権を配分するなど、一部の委員の情実行為が判明したからであった(『日本経済新聞』、九九・三・一七)。これには、EU議会が、一月十四日、EU委員会執行部へのけん責動議を採決し、結果は二九三票対二二二票で否決された背景がある。けん責の動議はマリン副委員長(スペイン)とクレッソン委員(元フランス首相)の監督責任や情実契約の疑いがかきつけであった(『日本経済新聞』、九九・一・一七)と言われる。

私見によればこれは象徴的な事件だと思われる。すなわち、ヨーロッパ統合が機械的に段階的に順調に進んでゆくかという点、そうではない面がある。簡単に言えば、非常に北欧的なものと、イタリア、フランス、スペインのようなラテン的なものとの文化的な対立がこれからはどんどん出てくるであろう。とくに、EUが連邦国家的なものに近づき、官僚組織が巨大になると、これからは北欧的なものが前面に出てくるのではないか。それは、これからのEUが福祉国家的なもの、労働憲章的なものを取り込めば取り込むほど、北欧諸国のかなりの犠牲を伴うものであ

るから、北欧諸国の要求は厳しいものになってくることと関連している。東欧にEUを拡大するにしても、そのことが、西欧的なEUにどれだけメリットがあるのかという点と非常に難しい。従来のEU諸国にかなりの負担が増えていくことは否定できない。

アメリカの政治学者スタンレイ・ホフマンによれば、フランス人は「誰もEUが万能薬とは見ていないが、それでも主要な問題の部分的回答にはなりうる」と考えているそうである（『日本経済新聞』、九七・六・二二）。たしかに、そういうところがあり、フランスとしてはもはや後戻りは出来ない。しかしながら、同時に、自分たちの国民性、文化にEUが適合してくるかという点と、そうあつて欲しくても、そうはならない。EUに北欧的なものがどんどん入ってくる時に、フランスはそれに抵抗できないだろう、と言わざるをえない。フランス市民が一国単位で異議申し立てをしても、はるかに早いスピードで増大するヨーロッパのテクノラシーのなかに飲み込まれ埋没してしまう⁽²⁴⁾、と考えるのが至当であらう。

第三に、それを裏から言つて、ヨーロッパ・スタンダードなるものはあるのか、また、それはバージョン・アップする可能性はあるのか、という問題である。EUの存在そのものがヨーロッパ・スタンダードの何よりの証拠である、と言つてよいのだが、もう少し具体的な問題として考えてみたい。例えば、選挙制度であるが、EU議会選挙は各国とも比例代表制選挙で選ばれている。それは大枠であつて、詳細は国によって違う。EU政治をもっと人々に奉仕させ、EUの共通善を人々に近いものにすることを目指して、EU政治の潜在力を利用してゆくために、EU議会選挙の「統一選挙手続き」(UEP) Uniform Electoral Procedureで行うべきである、そのことはEUに対する市民の政治参加とコミュニケーションを高めることになる⁽²⁵⁾、というさらに徹底した意見もある。

今後各国内における選挙の制度もそうなるかどうか、予想は出来ない。ただ、フランスの一九九七年国民議会選挙で、FNが十五%の得票率をあげながら、議席が一というのはおかしいという意見も学者の中から出てきている。EU議会の中に政党システムが確立されているとは言えないが、各国別の諸政党同士が、グループ的に結集、分布されてゆくり政党化が始まっているのも事実である。「政治面で一体化の原動力になりうるのは、個々の国益の違いを乗り越えて理念でまとまる政党しかない」とイギリスの政治学者ヒックスは指摘した(『日本経済新聞』、九九・四・六)。緩慢な形であれ、各国の諸政党の交流は、諸政党の党風、党組織に影響を与えてゆくと思われる。政党と市民の問題から考えてみると、例えば、環境保護政党である緑の党などはかなりコスモポリタンな政党である。この党の政策はもともとインター・ナショナルな性格を持っている。すでにヨーロッパ・スタンダードを実現しつつある政党の可能性を秘めているといつてよい。また、ヨーロッパのデモクラシーは、議会や政党だけによって担われているのではない。圧力団体・市民運動グループは、ブリュッセルで兩後の筈のように増えている。そして、政策セクターごとに、EU委員会の担当総局や議会の担当委員会と接触し、影響力を行使している。⁽²⁶⁾ EUに代議制民主主義は機能するかについて、ヒックスによれば、次のようになる。(一)、EUの市民が一つの選挙民層として行動することを阻む何の生来の文化的相違は考えられない。(二)、EUの政党システムは出現しつつある。政党の連合は親―反ヨーロッパの間ではなく左右の違いの間に、イデオロギーの違いからくる政治的家系にそって形成されてきている。(三)、これらの政党の連合は、EU議会内外に、凝集的な政党グループの枠組みに向けて各国内やEU議会の有力な政治家たちを結集させつつある。政党指導者サミットがその好例である。⁽²⁷⁾ 私見によれば、(三)はともかくとして、(一)、(二)には留保したい。とくに、(二)については、ベリノーの見解のほうを私はとりたい。

第四に、最後に、それに関連するが、ヨーロッパに社会民主主義は復権したのか、という問題がある。「企業より働く者の側に立って、より高い福祉の水準を目指す」という伝統的な西欧社会民主主義の流れをくむ政治勢力が、EUに加わる十五カ国のうち十三カ国で政権を担ったり、参加したりしている。苦しい財政、大量失業の重圧、国際的な経済大競争という環境の中で、「社民らしさ」はどこまで生きているのか(『朝日新聞』、九九・二・四)という観測がなされている。フランスに関して言えば、「選挙における政治勢力としての社会民主主義勢力は復調したが、イデオロギーとしての社会民主主義はそうではない」という見方もあるが、私見によれば、これはすでに述べたような「ジョスパンの方法」に関連する。「ジョスパンの方法」をここで手短かに再論すれば、それは脱ミッテランであり、環境保護やフェミニズムに目配りした、共産党、シューヴェヌマン派、緑の党の連合戦線(多元的左翼)であることよって、従来のフランス社会党のやり方を抜け出るものであったことを強調しておきたい。たしかに、イギリスのブレア内閣、ドイツのシュレーダー内閣らヨーロッパにおける社会民主党政権との連帯と強調をスローガンとして掲げはするが、それはあくまで時宜的なものであり、自らのために有利に利用しているにすぎないと言える。ただ、遠景として、この時期にヨーロッパに中道左翼政権が期せずして出揃ったことは、時代の転換点として構造的な分析が必要とされるかもしれない。フランス社会党は、一九八五年、トゥールーズ大会で市場重視への転換を確認している。この大会は「小さなバードゴードеспелク」と呼ばれていることも付言しておきたい。⁽²⁸⁾

(1) 関西大学法学研究所第二五回シンポジウム「ヨーロッパ政治の動向」、『ノモス』(関西大学法学研究所)、第十一号、二〇〇〇年、一五一—一九〇頁。

(2) Pascal Perrineau, Colette Yamal, «Introduction», in Daniel Boy et al. (dir.), *Le vote surprise: les élections législatives des*

- (3) 拙著『現代フランス選挙政治』、ナカニシヤ出版、二〇〇〇年、一三二頁。
- (4) 遠藤 乾「さまよえるヨーロッパ統合」『世界』一九九七年十一月号、三二五頁。
- (5) シルヴィー・ストリュエデル（土倉莞爾・大久保朝憲訳）『フランスの右翼と左翼』『関西大学 法学論集』、第五〇巻第三号、二〇〇〇年、一八五頁。
- (6) 岩本勲「一九九八年フランス地方選挙と右翼諸政党の再編成」『大阪産業大学論集 社会科学編』一一三号、一九九九年、二九四頁。
- (7) 畑山敏夫「世紀末のフランス極右ルペンの見果てぬ夢―(三)―」『佐賀大学経済論集』、第三三巻第二号、二〇〇〇年、三五、三九頁。
- (8) Pascal Perrineau et Colette Ysmal, «Introduction», in Pascal Perrineau et Colette Ysmal (dir.), *Le vote des Douze : les élections européennes de juin 1994*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques, 1995, p. 15. モーリナーデル「前掲論文」、一七四頁。
- (9) John Gaffney, «France», in Juliet Lodge (ed.), *The 1994 Elections to the European Parliament*, Pinter, 1996, p. 85.
- (10) Pascal Perrineau, «L'élection européenne au miroir de l'Hexagone», in Pascal Perrineau et Colette Ysmal (dir.), *Le vote des Douze*, op. cit., pp. 240-241.
- (11) Gaffney, op. cit., p. 89.
- (12) Ibid., p. 92.
- (13) Ibid., p. 96, p. 103.
- (14) Ibid., p. 93.
- (15) Ibid., p. 97.
- (16) 前掲拙著、七一頁。
- (17) Ibid., p. 98.
- (18) Perrineau, «L'élection européenne au miroir de l'Hexagone», op. cit., p.244.

- (19) Ibid., p. 247.
- (20) Ibid., p. 250.
- (21) Ibid., p. 104.
- (22) Pascal Perrineau et Colette Ysmal, «Introduction», op. cit., p. 17.
- (23) バスカル・ベリノー、中山洋平訳「新たな選挙力学の研究」『国家学会雑誌』第一二二巻第七・八号、一九九九年、一〇九頁。
- (24) 遠藤、前掲論文、同頁。
- (25) Juliet Lodge, «Making the EP Elections Distinctive», in Juliet Lodge (ed.), *The 1999 Elections to the European Parliament*, Palgrave, 2001, pp. 280-281.
- (26) 遠藤、前掲論文、三二六頁。
- (27) Simon Hix, *The Political System of the European Union*, St. Martin's Press, 1999, p. 186.
- (28) 森本哲郎「一九九〇年代後半期のフランスにおける選挙・政策・イデオロギー」『関西大学 法学論集』第五〇巻第六号、二〇〇一年、八〇頁。
- (29) 渡邊啓貴「シヨスパン仏社会党政府の政策」『国際問題』第四七三号、一九九九年八月、三六頁。

アラン・ギヨマーチによれば、一九九九年のEU議会選挙（第五回直接選挙）を理解するためには、二つの謎を探求する必要があると言う。第一に、かつてないほどに多数のメディアがヨーロッパ議会に関心を向けたのに、EUの少しの市民しか投票に行かなかった。第二に、EU加盟国の多数の国々で社会主義、あるいは社会民主主義の政党が国内政治を支配している（四つの大国を含んでいる）のに、今回のEU議会選挙では、「ヨーロッパ社会党」Party

of European Socialists (PES) はその支配的地位をキリスト教民主主義者と保守主義者の「ヨーロッパ人民党」European Peoples' Party (EPP) に取って代わられたことである。⁽¹⁾

一九九九年の六月十日と十三日のヨーロッパ議会選挙は六二六名の議員が初めて一度に選ばれた選挙であった。それまでの前議員は三つの局面で選ばれていた。第一の局面は、一九九四年六月、当時の加盟国十二カ国から五六七名。第二の局面は、一九九五年九月、スウェーデンで二二名、第三の局面は、一九九六年十月、オーストリアとフィンランドでそれぞれ二一名と十六名である。

一九九九年の六月十日と十三日のEU議会選挙の結果で、最も顕著な変化は、二つの大政党グループの位置の逆転である。「ヨーロッパ社会党」(PES) は三十議席失った。反対に、「ヨーロッパ人民党」(EPP) は二十議席増となり、新議会の最大会派となった。⁽²⁾

それぞれEU十五カ国から選出された新議会の政党の力関係はEU全体を通して国々によって様々である。もっとも重要な変化は、二、三の大国に現れた。皮肉なことであるが、投票率のもっとも低かったイギリスにおいて、起きた変化は一番大きかった。労働党は六二議席から二九議席に減少した。保守党は十八議席から三六議席に倍増した。自由民主党は二議席から五倍増の十議席となった。この国で四人に一人のみがいやいや投票した(投票率、二四%)⁽³⁾結果、この国の投票結果だけが、ヨーロッパ新議会の主要な政党間の変化を引き起こすことになった。⁽³⁾

ドイツでは、変化は小さいが意味深いものがある。社会民主党(SPD) は七議席、緑の党は五議席失ったが、他方、キリスト教民主主義政党とその同盟者は六議席増加させ、元共産党のPDSは六議席獲得した。⁽⁴⁾

フランスでは、ベルナル・タビが率いた急進党行動派のリストの消滅は社会党の十五議席から二二議席への増加

をもたらした。右翼・中道の政党であるRPRとUDFは別々のリストで競合し、どちらも七議席失った。ド・ヴィリエとバスクワに率いられた反ヨーロッパ統合のリストは、右翼・中道の政党の中では、単一政党で最大となる十三議席を獲得した。⁽⁵⁾

ドイツ、フランス、イギリスでは諸政党の分布に劇的な変化がおきた。ドイツでは与党連合の得票率は五ポイント減少し、明確な勝利者であるCDUとCSUは四八・七%の得票率で、一九九四年に較べて十ポイント上昇している。元共産党のPDSは、得票率がほとんど六%の上昇して六議席獲得となった。⁽⁶⁾

フランスでは、投票率は四六・八%に落ちた。一九九四年には左翼・中道が分裂したが、一九九九年には右翼・中道が分裂したので、力関係の分布を測定することは困難である。ド・ゴール派、自由主義者(DLとForce Démocratique 民主主義派「UDF」)は敗北した。すでに分裂していたFNからの二つのリストも同様に敗北した。勝利者は、緑の党、極左の「労働者闘争派」共産主義革命同盟「Lutte Ouvrière-Ligue Communiste Révolutionnaire」|| L O || L C R、奇妙な「地方連合」である「狩猟・釣り・自然伝統」派「Chasse, Pêche, Nature, Traditions」|| C P N Tである。これらの政党はすべて五%の敷居を越えて議席を獲得した。⁽⁷⁾

投票結果における政党間の勢力分布が大きく変わったのはイギリスである。しかし、投票率があまりにも低いためにこの変化をどう解釈するかは困難である。労働党の得票率は劇的に十五ポイント落ちて二八%となった。保守党は九ポイント上昇して三五・八%となった。緑の党とイギリス独立党UK Independence Partyは、それぞれ六・二%と七%の得票率となり議席を獲得した。⁽⁸⁾

EU議会選挙を取り巻く状況の中でヨーロッパ化が進展しなかった理由を考えてみよう。第一の発展の契機はユー

ロ十一カ国による交換レートの「凍結」と一九九九年一月のヨーロッパ中央銀行による通貨管理政策の接収であった。しかし、ラフォンテーヌ Lafontaine ドイツ蔵相の辞任はこのような流れを止めてしまった。第二の発展の契機は一九九九年五月のヨーロッパ議会により大きな権限を与えるアムステルダム条約の発効である。しかしながら、これらの制度改革も、EU委員会の考えも、普通の市民に充分理解されたとは言えない。第三の発展の契機は中央ならびに東ヨーロッパへのEU加盟国の拡大や現存の政策（とくに農業政策）の改革がゆっくりとおそるおそる進んでいることである。これは懐疑的な反対意見を押さえて統合実現の潜在的力を發揮させるまでに到っていない。⁽⁹⁾

しかも、EUを取り巻く環境の悪化は次のような面に現れている。一九九九年初頭のEU委員会の危機は、一九九九年五月の「賢人」報告とEU委員会の全員辞職で頂点に達する。これに対してEU議会は何の影響力も發揮できなかった（ただし、さきにも述べたし、後述のように、別の見解もある）。EU委員会は辞職したが、暫定委員会として実権を握り、年金を含む自分たちの利益は確保した。後継委員長はEU首脳会議でロmano・ブローディ Romano Poddiに決まったが、委員長や委員の人選にもEU議会は公的に承認するほかは何もできなかった。⁽¹⁰⁾

コンボの動乱も大きい。コンボ動乱はEU議会選挙前の期間を通してメディアの主要な焦点であり、公衆の関心を引きつけた。コンボの問題に比較すればEU議会選挙はいくぶん重要性を持たなかったことは否めない。⁽¹¹⁾

フランスでは、主要な戦いは左翼と右翼の間で行われたのではなく、同じ陣営の中で戦いが展開された。シラクの中道―右翼連合はさらに分解した。以前にはシラクを支持していたバスクワは、ド・ヴィリエに率いられる反ヨーロッパ統合の集団に加わった。RPRとUDFは別々のリストを作って互いに競争した。従来は漠然とした地方の反動的な政党であった「狩猟・釣り・自然伝統」派がある程度の信用、得票、議席を獲得した。社会党と緑の党は、散

文的だったとしても、異例にも協調を保持して、それぞれ効果的に選挙運動を行った。全体として活気のない選挙運動であったが、中道—右翼と極右それぞれ内部のかつては同盟者であった同志の激しい衝突が、時として、選挙運動を賑やかにした。ポスターは短期間に配布され、討論や公的な大集会はほとんどなかった。無関心が幅をきかせたことを考慮すれば、投票率は事前に予想されたほど低くはなかった。⁽¹²⁾

ドイツの選挙運動も低調であった。SPDと緑の党の指導者はほとんど運動しなかった。多分彼らは、ドイツがEU議長国である間のヨーロッパの主導権が、ドイツの選挙民に、ドイツ国内の続々とある困難さ——とくに、失業、緩慢で大胆さに欠ける諸改革、そしてSPD、緑の党内部にあるそれぞれの分裂——を忘れさせると考えたのであろう。CDUとCSUの指導者たちは、「SPDはドイツを統治する能力に欠けるからEU議会で思い通りにさせるわけにはゆかない」と主張して、選挙運動の焦点を国内政策の失敗においた。これらの批判は、まったく別の理由からではあったが、元共産党のPDSによって反響されていった。⁽¹³⁾

一九九九年のヨーロッパ議会選挙を通して市民から統治者へのメッセージは何であるか、解釈することはきわめてむずかしい仕事である。というのは、選挙結果のもっとも衝撃的な問題は、一九九四年と同じく、国家ごとに異なっており、ヨーロッパを横断して明らかに認定できる共通の傾向はないからである。しかしながら、投票結果だけ見れば、EPPとPESという二巨大グループの重要度の低落は、すでに一九九四年にも認識されていたが、続いている。それに比べ、国家内地域政党や反統合政党を含む小政党への支持は増大してきている。社会主義者は加盟国十五カ国のうち十一カ国の政権を保持していて、ヨーロッパ議会選挙が実施される直前に中道左翼のEU委員長を選出していたのに、敗北したことは意義深い。ただ、ヨーロッパ議会選挙は、EUの強力だがあいまいな執行府（選挙前

のプロデー委員長就任に見られる)ではなく、弱い立法府の代表を選んだだけであるから、「第二次的な」だけでなく、「無責任な」選挙に留まっている。結局、選挙民は統治者に対しても批判的であることを示したと言えよう。⁽¹⁴⁾

初めてフランスとドイツで投票率は五十%を下回ったことに象徴されるように、一九九九年のEU議会選挙は、EU議会の市民への妥当性のコミュニケーションの問題がEU諸国の間で悪化していることを示している。⁽¹⁵⁾

- (1) Alain Guyomarch, «The June 1999 European Parliament Elections», *West European Politics*, Vol. 23, No. 1, 2000, p. 161.
- (2) *Ibid.*, p. 162.
- (3) *Ibid.*, pp. 162-163.
- (4) *Ibid.*, p. 163.
- (5) *Ibid.*
- (6) *Ibid.*, pp. 166-167.
- (7) *Ibid.*, p. 167.
- (8) *Ibid.*
- (9) *Ibid.*, p. 167-168.
- (10) *Ibid.*, pp. 168-169. プロデーのイタリヤ国内における政治行動については、参照、村上信一郎「プロデーの失脚・タレーマの挫折・「オリウの木」の自殺…グローバリゼーションとヨーロッパ統合の下での中道左派政権のアポリア」『神戸外大論叢』第五一巻第七号、二〇〇〇年、二九―四六頁。
- (11) *Ibid.*, p. 169.
- (12) *Ibid.*, p. 171.
- (13) *Ibid.*, pp. 171-172.
- (14) *Ibid.*, pp. 172-173.
- (15) *Ibid.*, pp. 164-5.

三

次に、イギリスの政治学者A・L・テアスデイルの論説を要約しながら、別の角度からこの一九九九年EU議会選挙を考えてみよう。六月十一十三日のEU議会選挙は十五カ国のうち三カ国を除いて投票率が低下した。投票者数は平均して有権者数の半数以下であり、一九七九年のヨーロッパ議会選挙始まって以降初めてのことだった。⁽¹⁾

EU諸国のうちでいくつかの国々では、とくにフランスとイギリスでは、より緊密なヨーロッパ統合が持つ政治的含意は公然とした論争となり、中道右翼の諸政党を分裂させ、左翼を政権へと駆り立てた。現在のEU加盟国やその周辺の地域において、ヨーロッパは、経済、社会、政治の強力な要因となって作用している。事実、EUはヨーロッパの地域のレベルで、行政においても利益団体においても、国家と均衡する役割を果たしている。とはいえ、国内政治におけるヨーロッパの増大する重要性は、ヨーロッパの将来について国家の政策を表明する伝達手段としての何らかの促進する役割を担わせるように、EU議会選挙を変化させるまでには到っていない。⁽²⁾

EU議会選挙への非参加を説明するために従来次のような論議が引き合いに出されている。第一に、EU議会はEU政治の中心的な問題を決定するところではない。そのような権力は依然として基本的には加盟国政府によって首脳会議の場で行使されている。第二に、EU議会の政治的分割は明確な政党の線で構造化されているのではない。多くの政治的グループは多様であり、どのグループもそれだけでは多数派になれず、すべての決定は妥協的になっている。第三に、EU議会はそれ自身、深化するヨーロッパ統合の擁護者であり、一九五〇年以来「もっとヨーロッパ」を一貫して推進してきた。したがって、EU政治の強力な中心部の発展を縮小するか停止したいと望んでいる者は誰でも、

EU議会選挙に投票することに関心を持たない。EU議会選挙のまさに背景をなすものは、EU議会そのものに現れたEUが重要な政治的危機にあるということだった。

北ヨーロッパの中道右翼、緑の党のEU議会議員による数ヶ月にわたる圧力は、議会の多数の賛同を得て調査委員会がEU執行府の責任者の重大な誤った運営や詐欺の事例を発見すると、サントール Sater 委員会に辞任するようきびしく迫り、結果として一九九九年三月十五日のEU委員会全員の辞職となった。⁽³⁾

EU議会がどこまでEU委員会やEU委員長の行動を規定できるか、というのは重要な問題である。すでに、一九八九年、当時のEC議会の社会党グループの一部議員が、ドロール委員会との社会問題への取り組みが不十分だとして、不信任案を提出する構えを見せたところ、ドロール委員会と同グループの間に特別会合が設けられ、ドロール委員会は社会問題に対してより積極的になったという経緯もある。⁽⁴⁾

EU十五加盟国、二億八千九百万人の選挙民が六月十日と十三日に投票所に行くことになっていた。だが、実際に投票したのは一億四千三百万人の選挙民が投票しただけだった。彼らは約一万人の候補者、三〇三の政党リストから六二六人のヨーロッパ議会議員を選んだ。一一八くらいは各国の政党から選ばれた六二六人の議員たちは大体七つのグループに落ち着いて行く。明らかに変わったことは、EU議会内の勢力のバランスにおいて、左翼から右翼への議席の移動はただの十八議席（EU議会議員全体から見れば、一一・九%）だったということである。イギリス保守党の十八議席増——そして以前見られたイギリス労働党の過剰すぎた議席数は終わりを告げた——だけがEU議会全体の左翼—右翼の勢力変化を説明していることになる。⁽⁵⁾

EU十五加盟国を通して見た各国別に見た選挙結果の勢力分布のパターンは様々である。英独仏伊西の五大国の議

席を取り上げると、四二四議席で全体の六八%になるが、二国だけが右翼に移行する——イギリスは劇的に、ドイツは意義深く——が、三国は左翼に移行する——フランスは意義深く、イタリアとスペインは控えめに——。別の言い方をすれば、四大国は国内で左翼が政権についているが、二国は右翼へ、あと二国は左翼へ移行した。五大国中唯一の右翼政権のスペインでは微小に左翼に移行した。⁽⁶⁾

EU全体を通していくつかの特徴が指摘できる。第一に、右翼に移行したのは四カ国に比べ、多数の国々(八カ国)が左翼に移行したとはいえ、そして八カ国の内六カ国において社会主義政党が政権党であったとしても、いくつかの政党自身は現実には議席を減らしている。この現象は、イタリア、オランダ、ギリシア、オーストリアに見られ、これらの国々では社会主義政党の首相を持っていながらその政党は議席を増加させている。社会主義政党が政権党であり、それがEU議会選挙の勝利に直結した国は、ポルトガルのみである。イギリス、ドイツ、スウェーデン、フィンランド、ベルギーにおける社会主義政党の同様の敗北を考慮するならば、このことはEU議会選挙において、実際よりもっと大きな左から右への揺れがあった一般的な印象を持つことを助けるであろう。今回のEU議会選挙の結果、PESグループはEU議会左翼の六四・七%を占めている。それ以前は七二・三%だった。⁽⁷⁾

ヨーロッパ議会選挙の第二の特徴は、緑の党の見事な勝利である。彼らは、ベルギー(得票率十一・五%から十五・九%)、フィンランド(得票率七・六%から十三・四%)、オランダ(得票率三・七%から十一・九%)、フランス(得票率二・九%から九・七%)、オーストリア(得票率六・八%から九・三%)、イギリス(得票率三・二%から六・三%)と前回よりも得票率を伸ばし、スペインでは四・五%でデビューした。また、ルクセンブルクでは十・七%と現状を維持した。緑の党が後退した主な国は、スウェーデン(得票率十七・二%から九・四%)、ドイツ(得票率十・一%から六・

四%)、アイルランド(得票率八・六%から六・七%)であるが、依然として確固とした得票率と議席を分有している。緑の党は今回のEU議会選挙の成功で一段と国内政治においてもヨーロッパ政治においても重要な行為者となった。⁽⁸⁾

第三に、ヨーロッパ問題を表に出して選挙を戦った政党も善戦した。イギリスの保守党、フランスのバスクワッド・ヴィリエ・リスト、イタリアの急進派と民主派、スウェーデンの自由主義者、デンマークの反EU政党などである。ヨーロッパに関してはつきりとした意思表示——緊密な統合に賛成であれ反対であれ——をした諸政党は、ヨーロッパ規模で投票率が低下している文脈の中で、しつかりとした支持を動員することが容易であることを見出した。⁽⁹⁾

EU議会選挙の長期的な政治的意味は、EU議会が次の任期の五年間にEUの政策決定にどの程度影響力を与えるかによって、明らかになって来よう。強化された中道——右翼の多数派の効果は、EPP/EDグループとELDR左派の関係如何、右翼に属する種々の断片的勢力の投票パターンに依存するだろう。ちょうど、ニコル・フォンテーヌNicole Fontaineが、一九九九年七月二十日、三百票で、PESからの候補者マリオ・ソアレスMario Soaresの二百票、緑の党の候補者ハイド・オウタラHeide Hautalaの四九票を破って、EU議会議長に当選したように右翼勢力が広範に統一すれば、大きな勢力となるであろう。⁽¹⁰⁾

EU議会選挙の結果は、EU議会内の主な政治的グループ間の力学にいくつかの重要な変化を記したと言える。EPP/EDグループは、単なる伝統的なキリスト教民主主義の砦となるよりは、中道——右翼の包括勢力になることを続けている。一九八〇年代後半に始まった拡大路線は、このグループが一九七九年以来初めてEU議会における多数派になることによって成果をあげたことになる。ただし、このグループは、イギリスとフランスのメンバーのせいによって、いっそう保守的な色彩を持つことになる。すなわち、イギリスの保守党の勝利に加えて、フラ

ンスのRPRが、一九六〇年代ド・ゴールによって創設された分離グループとして存在していたにもかかわらず、それを断念してこのたびEPP/EDグループに移行して来たからである⁽¹¹⁾。

PE Sグループについて言えば、ここ十年支配的だったイギリス労働党の支配から劇的に再均衡へと動いた。イギリス労働党は旧EU議会議員の時はPE Sの二九%を占めていた。今や十七%となった。ドイツのSPDの敗北、スペイン、ポルトガルの社会主義政党的躍進、フランス社会党のリストの一本化による強化とあいまってPE Sグループの重心があきらかに南ヨーロッパの方に移った。PE Sグループの代表がポーライン・グリーン Pauline Green からアンリケ・バロン・クレスポ Enrique Baron Crespo に替わったことはこの重心移動を反映している⁽¹²⁾。

- (1) Anthony L. Teasdale, «The Politics of the 1999 European Elections», *Government and Opposition*, Vol. 34, No. 4, 1999, p. 435.
- (2) Ibid., p. 436.
- (3) Ibid., pp. 437-438.
- (4) 遠藤 乾「ヨーロッパ統合のリーダーシップ」佐々木隆生・中村研一編著『ヨーロッパ統合の脱神話化』(ミネルヴァ書房、一九九四年)、二二〇頁、注(58)。
- (5) Teasdale, op. cit., p. 442.
- (6) Ibid., p. 444.
- (7) Ibid., pp. 449-450.
- (8) Ibid., p. 450.
- (9) Ibid.
- (10) Ibid., p. 452.
- (11) Ibid., p. 453.

四

ここで、対象をフランスに絞り、主としてジェローム・ジャフレにしたがって、問題点をまとめてみよう。選挙結果については末尾の附表を参照していただきたい。二十年目、五回目の選挙となったEU議会選挙は、諸政党にとっては不安の種であり、多数の選挙民にとっては無知の対象であった。大論争も関心の盛り上がりもなかった選挙キャンペーンの後、六月十三日の選挙結果は非常に高い棄権率となって現れた。五二・二%の棄権は、一九八八年のニュー・カレドニアに関する国民投票を除けば、フランスのあらゆる種類の選挙の中で史上最高であった。この選挙で読み取れるのは、とくにバスクワとド・ヴィリエに率いられる「フランスとヨーロッパからの独立連合」《Rassemblement pour la France et l'Indépendance de l'Europe》＝R F I Eのリストに見られる右翼の反ヨーロッパの圧力と、緑の党や「狩猟・釣り・自然伝統」派のような環境派のリストの成功による反古典的政党圧力である。とはいえ、政権にある多元的左翼 *gauche plurielle* には損傷はなかった。他方、穏健右翼は、十五年振りの極右の弱化にもかかわらず、有利な展開を達成できなかった。⁽¹⁾ 付言すれば、白票、無効投票に加えて「周辺勢力」(伝統的な四大政党である共産党、社会党、R P R、U D F以外の党)への投票の合計が有効投票の四九%になる。これに棄権率を上乗せすると、七八・三七%で、選挙民のたった二二%弱のみが四大政党を支持したにすぎない。⁽²⁾

大量の棄権の理由としては、ヨーロッパ市民という実感をもつことの難しさがある。フランスで、「フランス人であると同時にヨーロッパ人である」と考える人は質問を受けた人の三三%しかいないだけでなく、四年前の同様の質

問の回答よりも五ポイント低下している事実がある。また、月収五千フラン以下の人たちの六一％が今度の選挙を棄権したが、二万フラン以上の人たちは三三％しか棄権しなかった。⁽³⁾

反ヨーロッパの局面のもうひとつの要素は「狩猟・釣り・自然伝統」派のリストが多数の得票を獲得したことである。この選挙制度のもとで第三の勢力となるために、この派は得票率五％の枠を超え、EU議会に議席を確保した。すなわち、「狩猟・釣り・自然伝統」派は百万票以上の得票数で六・九％の得票率となり、本国だけの得票数では議席の取れなかった共産党を凌駕した。ただし、共産党は海外県の票で議席を確保した。「狩猟・釣り・自然伝統」派は二二の県で十％以上の得票率を確保した。一九八九年には六県、一九九四年には二県だった。ソナム Somme 県では二七％の得票率となり、その県におけるすべてのリストのトップとなった。「狩猟・釣り・自然伝統」派は男性票が圧倒的に多く、調査によれば、男性七三％、女性二七％となる。この割合は八九年、九四年も同じである。同じく調査によれば、「狩猟・釣り・自然伝統」派選挙民の六七％は反緑の党として位置付けられる人たちである。これは、反緑の党志向が、穏健右翼が五五％、極右が五二％、左翼が十四％と比べて興味深い。そのことは、この派の形成がそのような見解を基にしており、将来ポワネが重要な役割を演じることには支持をしないことになる。⁽⁴⁾ 付言すれば、「狩猟・釣り・自然伝統」派が眼の敵にしているのが、環境問題では競合する緑の党である。この派は地方の小生産者の不満を吸収している意味ではプジャーディストと共通しており、今回は穏健右翼とFN陣営の混乱の間隙を縫って成功した。⁽⁵⁾

FNの得票率は、一九九四年のEU議会選挙では十％だったが、一九九五年から一九九八年にかけて、大統領選挙、国民議会選挙、地域圏議会選挙、県議会選挙いずれも、常に十四―十五％に達していた。ところが、一九九八年十二

月のFNの分裂によって、猛烈に反目しあう二つのリストに分かれて争い、両者を合わせても9%にしか達しなかった。ルベンは大統領選挙時には四百万票集めたのに、今回は百万票集めることができなかった。FNの後退は非常にはっきりしている。政治的には6% (FN) プラス3% (MN) は9%ではない。分裂し弱化する事によって、二回投票制の第一回投票から第二回投票への敷居を越える時に、他党への障害となる能力を失ったことになる。すなわち、市町村議会選挙の敷居10%、県会議員選挙の敷居10%、国民議会選挙の敷居12.5%に関わる事である。

五年前、人口二万人以上の三九四の市町村で、FNが10%以上の得票率があったのは二五九の市町村であった。一九九九年の今回のEU議会選挙で、これを達成したのは、ルベンのリストで二九、メグレのリストは四のみであった。

FNの強い市町村を個別に見ると、ドルー Dreuix では、一九九五年の市町村議会選挙で三五.2%であったのに、一九九九年のEU議会選挙でルベンのリストは十一.8%、トゥーロン Toulon では、一九九五年、三一.8%であったのに、一九九九年、ルベンは十.8%、ルーベ Roubaix では、一九九五年、二四.4%、一九九九年、ルベンは十.五%、ミユルーズ Mulhouse では、一九九五年、三十五.5%であったのに、一九九九年、ルベンは八.三%、ヴィトル Vitrolles では、一九九五年、四三.1%であったのに、一九九九年には「市長の夫君」《maire consort》のメグレのリストは二四%となっている。⁽⁶⁾

ルベんとメグレという二つのリストの対決は従来の極右の首領ルベンが得票率で五.7%対三.3%の割合で優勢であった。ルベンのリストは今回のEU議会選挙で五議席獲得できたが、メグレのリストは選挙の敷居を超えることができず、選挙費用の返却をしなければならなくなった。結果を考察すれば、ルベンの優勢は圧倒的である。ルベンはメグレに、本国の二二の地域圏 Régions、本国の九六県のうち九五県、三九八の人口二万人以上である市町村のうち

三八一で勝利した。メグレの勝った唯一の県は、ブーシュ・デュ・ローヌ Bouches-du-Rhône 県で重要である。ただし、この県の首都マルセイユではルベンがトップに立ち、彼は近隣の市町村でもメグレを征服しようと目論んでいた。メグレがルベンに勝利したのはフランス本国で十七市町村にすぎない。それらは、ブーシュ・デュ・ローヌ県の七市町村とミュルーズ、ニューイー・シュル・セーヌ Neully-sur-Seine などであつた。⁽⁷⁾

極右の構成分子として、FNとMNの二つのリストはきわめて近い関係にある。ルベンは若きライバルに対して政治的というより社会学的に一つの勝利を確保したことによって優勢を保っている。事実、ルベンは、この最近数年来、彼が伝統的な極右の票に合体させることに成功してきた労働者、低学歴、政治的無関心、極右の意識のない人たちといたつた、FNにとつての新たな階層において明らかな優位を示した。ルベンの彼のライバルに対する勝利は、彼の個人的イメージによると同時に、伝統的な極右の支持基盤を重ねて、極右でもなければ政治意識もない「無主義者」《*inistes*》の票を獲得する能力にあつたと言えよう。⁽⁸⁾

FNの中心問題は、一九九八年の地域圏議会選挙での躍進(得票率、十五・一%)の余勢を駆って、右翼の再編成になるはずであつた。しかし、一年後には、小政党として政治的辺境から再出発することになった。一九九四年のEU議会選挙に比べてすべての県で極右は低調であつた。とりわけ、FNの要塞であつた地中海沿岸の県で低落は著しかった。ヴァール Var 県、アルプ・マルティム Alpes-Maritimes 県、ピレネー・ゾリアンタル Pyrénées-Orientales 県などがそうである。⁽⁹⁾

極右における選挙結果の分裂の論理は、党員の分裂と同じ論理に従うわけではない。FNの分裂に際しては、最初、性急な観察ではあつたが、分離派のブルーノ・メグレが優勢であると見られていた。たしかに、メグレ派はFNの組

織を骨抜きにしたが、支持基盤の大部分の者はルペンに忠誠であった。党組織を骨抜きにすることと、選挙民を納得させることは、別のことである。メグレがFNの選挙民の六分の一しか獲得できなかった冷酷な教訓はここに⁽¹⁰⁾ある。

FNは十五年振りに周辺政党となった。FNの五・七%という得票率は、「狩猟・釣り・自然伝統」派の六・七%以下である。ルペンはこれまでのFN支持の選挙民の約半分しか獲得できなかった。失った票は、メグレのMN、パスクワのナシヨナリズム、「狩猟・釣り・自然伝統」派のプジャード主義に引き寄せられた。一九九七年の国民議会選挙でFNに投票した選挙民に関する「フランス・アンケート調査会社」《Société française d'enquêtes par sondages》
|| SOFRESの調査によると、彼らは今回のEU議会選挙で次のように移動した。すなわち、十七%のみがメグレ、ルペンが五三%、パスクワが十四%、九%が「狩猟・釣り・自然伝統」派、七%がその他となっている。パスクワ・リストは、もともとFNの要塞であった地中海沿岸の県、すなわちアルプ・マルタイム県で二一・四%、ヴァール県で一九・二%の得票率だった。また、ウール・エ・ロワール Eure-et-Loire 県、エロー Hérault 県、ソンム Somme 県での「狩猟・釣り・自然伝統」派の躍進は極右に目に見える崩壊をもたらした。今回の選挙で棄権が増大したのも、FNの内部分裂によって途方にくれたFN選挙民によるところが大きい。SOFRESの選挙後の調査によれば、FN同調者の七十%が棄権した。他方、RPRは四五%、UDFは三二%、社会党は四四%、共産党は三六%となっている。⁽¹¹⁾

要するに、フランスにおける極右の選挙的開花の時期は終わった。一九九八年冬のみならず構わぬ内部闘争はFNが「他とは違う政党」である可能性を失わせた結果となった。極右と穏健右翼の接近と、極右の右翼への侵入、というメグレ派の戦略は失敗した。と言うのは、人民的抗議の選挙民であるFN選挙民の堅い志は、メグレの国家的テク

ノラートの手法 *le style national-technocratique* に自分の場を見つけようとはしなかったからである。⁽¹²⁾

穏健ないしは共和主義右翼——今回の選挙では、フランソワ・バイルー François Bayrou、ニコラ・サルコジ Nicolas Sarkozy、バスクワのトリスト——は、この三年間で四度目の敗北を被る事によってあらたな後退をした。

合計三四・九%の得票率は、戦後最低の一九九七年国民議会選挙をさらに下回っている。極右が行使する害悪で、左翼が得をしている、といったよく言われる議論はすっかり力を失った。とはいえ、おのおのの陣営に、極左や極右を含めた左翼／右翼全体の関係は縮まっているが、ミッテランが大統領に再選された直後の一九八八年の県議会選挙以後、左翼はまだ有利とは言えない。⁽¹³⁾

穏健右翼のあらたな敗北は避けられないものではなかった。多数の人たちは国民議会選挙や地域圏議会選挙で穏健右翼の連合を強調していたのであるが、今回の選挙のような複数のリストによる政治選択の幅の拡大から利益を引き出すべきであった。とくに、穏健右翼は極右の息切れからの恩恵に浴するべきであった。ところが、最悪のことは、FN票の後退した無視できない部分を取り戻しておりながら全体としては敗北したことにある。一九九八年の地域圏議会選挙から一九九九年のEU議会選挙において、二万人以上の市町村でFNの後退と穏健右翼の票の変化は緊密な関係にある。FNが失った場所は穏健右翼が伸びた所であった。⁽¹⁴⁾

穏健右翼の敗北は一部分社会的なものである。ド・ゴール將軍の引退後、穏健右翼は労働者への影響力を失った。一九八〇年代には中産階級において支持率を落とした。一九九九年のEU議会選挙では富裕階級(上級管理職)においても急激な後退を示した。フランスの穏健右翼はもはや退職者や非就業者のみにしか高水準の支持を得られなくなった。このことは彼らが伝統的フランスに引きこもり、どの水準であれ活動的な階層とは切断されていることを意

味する⁽¹⁵⁾。

九・二%の得票率によってバイルーに率いられた新しい Nouvelle UDF は、一九八九年、シモーヌ・ヴェイル Simone Veil が一九八九年に獲得した八・四%を上回り、とりわけ穏健右翼三政党の中で二六・四%を占めることによって好結果を得た。十年前には、この中道派は、ヴァレリ・ジスカール・デスタンの強力な連合に直面して二一・六%しか獲得できなかった。バイルーの票は、ヴェイルやルカニエ Lecanuet の伝統的な中道票だけでなく、一九六九年のポンピドゥー Pompidou、一九九五年のバラデュールによって代表される伝統的右翼の票にまで伸張していった。とくに、親ヨーロッパの票が大きい。マーストリヒト条約に関する国民投票で賛成票を投じた層との相関関係はきわめて高い⁽¹⁶⁾。

十二・五%の得票率で、サルコジーマドラン Madelin の RPR-DL のリストはたくさんの屈辱を一度に被った。第一に、第五共和制下における歴代のド・ゴール派の記録の中で最低の得票率だった。第二に、セガンの RPR 指導者からの離脱前の選挙民の投票意図（十八―二〇%）より支持率の明らかな低下。第三に、大事なことであるが、パスクワという異端派のリストに敗れたことである。サルコジーへの投票はシラク的ド・ゴール派の伝統に忠実に一致している。ただし、それは縮小模型として機能している。ド・ゴール派とシラクへの投票は、シラクが反・ジスカールの時期には、ポンピドゥーやド・ゴールの票と重なり相関関係は高かった。それらの票は一九九四年のシャバン・デルマス Chaban-Delmas に行かなかった。ウルトラ・シラク派として彼らのリストの悪い結果は大統領の弱点を知らせている⁽¹⁷⁾。

パスクワとド・ヴィリエの RFI-E のリストは彼らの名前の下に反ヨーロッパの票と反コアビタシオンの票を結合

することによって右翼の票をかっさらった。それは共和国大統領に対して距離を置く二重の徴であった。彼らのリストはフランスの利益擁護をヨーロッパの建設にはるかに優先して掲げている唯一のリストであった。因みに、RPR—DLのリストはヨーロッパと(治安が)安全でないこと *insécurité* を優先しており、新UDFのリストはヨーロッパとフランスの利益(彼らによれば、それは反目しない)を優先した。極右は治安を最優先して今回の選挙のヨーロッパ的側面はまったく無視する。バスクワ票はまた反コアピタシオン主義者の票でもある。投票当日のSOFRESの調査によれば、RPR同調者の分裂はコアピタシオンに対する考え方の違いに一部分ある。議会期間中コアピタシオンは正常に運営されると考えるRPR同調者の四九%がサルコジ、二五%がバスクワのリストに投票した。議会期間中にコアピタシオンを解消するために国民議会選挙をやり直すべきとする者の四四%はバスクワ、三〇%はサルコジを支持した。最後に、RFIEのリストはルペン主義者を回収する場所となった。一九九八年—一九九九年のFNの後退とバスクワ票との関係係数はサルコジやバイルーのそれに比べて高い。ところで、RPR—DLリストの破局的記録はRFIEリストの成功でもあるが、RFIEは、有利な条件にもかかわらず、一九九四年ド・ヴィリエが集めた十二・四%をほんの少し上回っただけだった。RFIEの記録の限界は庶民層 *niveaux populaires* の支持の弱さにある。これが往時のド・ゴールのフランス人民連合RPFとの相違を説明する。⁽¹⁸⁾しかし、バスクワがEU議会選挙後に新たなRPFという新党を結成したことは注意が必要である。RPFの結成はフランスの政党システムを変えてゆくだろうし、RPRやFNの支持基盤を衰弱させてゆくだろう。ヨーロッパ懐疑派やポピュリストのRPRからの離脱や、EU議会内でRPRのEPPグループへの加入は、RPR、DL、UDFの統一が起こりうる可能性を示唆している。ただ、イデオロギー的な相違は目立たなくなったとしても、政党指導者の野心や人的関係は分裂

を克服するにはあまりにも大きい。二回投票多数代表制という選挙制度や、新ド・ゴール派の結成は、次の選挙における中道右翼のチャンス⁽¹⁹⁾を必ずしも弱めてはいない。

社会党はほとんど理想的な結果になった。これまで五度のEU議会選挙で、社会党は初めて二一・九%の得票率で、トップに立った。増大する比例代表制選挙つきものの政党の分散を考慮すると二十%のバーを越すことは大変なことである。しかも二位(RFIE)に九ポイント近く差をつけている。サルコジとバイルールのリストの得票率を合計してもフランスワ・オランド Francois Hollande (社会党) のリストに、二一・七%対二一・九%で及ばない。与党の、社会党と共産党と緑の党の多元的左翼 *gauche pluraliste* は穏健右翼を得票率で上回り、極左の票も加えると、一九八八年以来、久しぶりに、左翼と右翼の票が拮抗することになった。さらに言えば、反政府的な抗議の危機を秘めた極左の票は上昇しなかった。ラギュー・クリヴィヌ Laguille-Krivine のリスト L O - L C R は今回のEU議会選挙で五二%獲得したが、九五年大統領選挙におけるアルレット・ラギュー彼女自身の票、五・四%に及ばなかった。より細かく言えば、今度の選挙結果は、ジョスパンにとって、社会党が支配的な政党になったとしても主導権を持った政党にはなれなかったことを意味している。オランダのリストは多元的左翼の中で五六・九%を占め、五十%を越しているが、一九九七年総選挙のときは、六一・五%を占めていたことを考えれば、低下⁽²⁰⁾している。

したがって、三つの兆候が社会党を慎重にさせる。第一に、社会党の勢力範囲が狭くなってきている。一九八九年のEC議会選挙では、三五の県で二五%以上の票を獲得した。一九九五年の大統領選挙では、それが三一の県であった。一九九九年のEU議会選挙では二一の県のみ⁽²¹⁾に減少する。

第二に、一九九〇年以降、社会党は民衆層に浸透していない。この十年間に、社会党は、従業員 *employés* 層の支

持率を十八ポイント、労働者層の支持率を七ポイント失っている。他方、高級管理職から六ポイント、そのうち高所得者から四ポイント多く獲得している。社会党の選挙民のうち、労働者と従業員の層は、一九八九年が三六%、一九九五年が三二%、一九九九年には二二%のみとなっている。つまり、社会党を従来支持してきた者のうち一部分が、今回の選挙の時には社会党を離れて緑の党に投票したのである。出口調査によれば一九九五年の大統領選挙第一回投票でジョスパンに投票した者のうち十五%がコーン・バンデイ、四%がラギュエ。五%がユーに投票している。社会党への投票の不安定性と流動性が指摘できる。⁽²¹⁾ やむをえない社会党の中間ないし高級管理職層への支持基盤の変容はコーン・バンデイに率いられる緑の党のような政党との直接対決が不意に来ることを予見させる。⁽²²⁾ 念のためには言えば、SOFRESの調査によれば、コーン・バンデイに投票した者のうち来る大統領選挙においてポワネに投票意図を持つのは少数(三九%)であり、ジョスパンに投票意図を持つ者が多数(四五%)である。⁽²³⁾

第三に、一九七一年のエピネー Epinay 大会での社会党の再建以来、フランス国内で行われた十五の国政選挙(大統領選挙、国民議会選挙、ヨーロッパ議会選挙)の記録を検討してみると、一九九九年EU議会選挙における社会党の記録は、絶対得票率 inscrits で最後から二番目の九・八%、有効投票得票率 exprimes では十一番目の二一・九%であった。絶対得票率では棄権率が作用する。社会党にとっての偉大なる数年は、一九八一年の国民議会選挙から一九八八年の国民議会選挙までの期間である。それは、ミッテラン大統領執政第一期の七年間と、熱狂的な大統領再選の直後に行われた国民議会選挙までを意味する。社会党はもはや三五―四十%の得票率の支配政党の位置をしめる希望はない。二五%の得票率を目指し、二回投票式多数代表制の選挙制度のなかで、第一回投票で首位を取り、第二回投票で連合能力で強くなるようにしなければならない。⁽²⁴⁾ 付言すれば、一九九八年の統一県議会選挙における、三十・

九%や地域圏議会選挙の得票率二十・六%より、今回のEU議会選挙の得票率は後退している。⁽²⁵⁾

ここで、一九九九年のEU議会選挙の前年に行われた一九九八年の地域圏議会選挙について補足しておきたい。地域圏議会選挙は第一度目が一九八六年、第二度目が一九九二年、一九九八年は第三度目となる。三度目の地域圏議会選挙にもかかわらず、選挙は少しも地域的でなく、地域化されず、国政選挙の趣を呈した。複数の地域的なキャンペーンやフランス諸地域の異なる関心を引き受けた選挙の面もあったが、基本的には国家的な問題、例えば、権力についた多元的左翼の十ヵ月後の評価、三五時間労働制、失業対策のような問題をめぐって、組織された単一のキャンペーンに関わるほうが多かった。逆に地域圏議会が発足してから一九九八年まで十二年間の地域圏議会の民主的な運営にもかかわらず、地域圏議員の評価、地域圏の計画、地域圏制度もっと広く言えば地域共同体にもたらされる改革などに関する論争は弱かった。これについての無関心の制裁として選挙民の四二%の棄権が現出する。それは八六年より二十%多く九二年より十%多い。⁽²⁶⁾とはいえ、この選挙は、一九九七年の国民議会選挙に始まり、二〇〇二年の大統領選挙と国民議会選挙で終結する選挙サイクルの一環をなす。一九九七年国民議会選挙後十ヵ月という選挙サイクルのこの時点での政治的気候と選挙民の意向は現内閣に比較の有利な結果が出ている。出口調査によれば、現内閣支持が三八%で、不支持が三三%であった。⁽²⁷⁾中間選挙は大抵現政権に批判的な数字が出るがサイクルが始まったばかりであったからでもある。

来るべき選挙において、社会党はFNの長期的な弱体化を将来の展望の中に入れなければならない。FNの弱体化は、二回投票式多数代表制において右翼が第二回投票に進出する際にFNが障害になっていたのを無にする。それまでは、社会党にとって、FNのお陰で第二回投票進出は有利であったのだが。例えば、一九九五年市町村議会選挙で

は、FNの存在が左翼の勝利に大きく貢献した。市町村議会選挙では二回投票制で、第一回投票から第二回投票への敷居が十%であることもFNが第二回投票に残ることを容易にする。ちなみに、国民議会選挙の敷居は十二・五%である。人口九千人以上の二三三の市町村のうち二二六の市町村でFNは第二回投票に進出して、残りの六市町村は穏健右翼のリストに合併していった。そのようにして五三の都市において、左翼の勝利に決定的な役割を果たした。内訳は、社会党四三、共産党一〇であった。一九八九年には、左翼全体で十一に過ぎなかった。⁽²⁸⁾

結局、極右は今後の政治的光景において主要な役割を消失するであろう。その妨害者の消失は左翼／右翼／極右の政治空間の三極化から左翼／右翼の双極化の強化に移行することになる。そのことは社会党にとって重い課題となるであろう。⁽²⁹⁾

市民社会への開放という大義にもかかわらず、あるいはそれ故に、共産党が後援した「決起せよ！ ヨーロッパ」《Rouge l'Europe》のリストは、共産党の選挙の歴史の中で最低の得票率となった。共産党の得票率は、緑の党にはるかに引き離され、「狩猟・釣り・自然伝統」派と同順位となった。一九八九年から一九九九年にかけてのEU議会選挙での共産党の得票率の後退はわずかにポイントである。しかし、十年前には、得票率が十%を超えていた県が二十県だったのに、今回の選挙では十県に過ぎなくなっている。調査によれば、共産党は極左の人たちから大量の票を集めることが出来なくなっている。一九八九年には極左の人たちの四二%が共産党に投票したが、一九九五年には三六%、一九九九年にはわずか二九%であった。ちなみに、一九九九年には極左の人たちは、二十%が極左のリストへ、二六%が社会党、一九%が緑の党に投票した。労働者層の投票を見ると、一九八九年には、労働者層の十二%、一九九五年には十%、一九九九年にはわずか七%が共産党に投票した。従業員層を見ると、一九八九年には、従業員

層の十六%、一九九五年には十%、一九九九年には八%が共産党に投票した。このような喪失は共産党の得票の社会学を大きく再考しなければならないであろう。一九九九年六月のEU議会選挙において、共産党史上初めて、高級管理職と中間管理職の同党の得票率二九%が、労働者や従業員の得票率二六%を上回った⁽³⁰⁾。

今回のEU議会選挙で、コーン・バンデイのリストの獲得した九・八%とアントワヌ・ヴェシュテル Antoine Waechter の独立したリストの一・六%を加算した上で、環境保護派の成功は、緑の党の伝統と、かつてはブリス・ラロンド Brice Lalonde が代表格であった都会的で自由な環境派との合体の成功であった。実は、それまでのフランスの環境保護派の運動は様々な政治的家系に分かれていた。一九九四年四月十六、十七日の緑の党大会で、緑の党はラロンドの環境世代派とのいかなる協力もしないことを決めたことがあった⁽³¹⁾。今回はかなり統一された。大雑把に言えば、今回のEU議会選挙で環境保護派に投じられた票は、自由で、学歴がある若年層に多く、都市の規模が大きくなればなるほど得票率が高くなる。コーン・バンデイのリストの票は左翼の票であると見なされる。出口調査によれば、このリストに投票した者のうち、七三%が左翼で、内訳は極左二七%、左翼四六%となっている。一九九五年の大統領選挙第二回投票では、このリストに投票した者のうち六一%がジョスパンに投票しており、シラクに投票したのはわずか十七%、残りの二二%は投票しなかった。世論調査でも、緑の党支持者のうち、八三%がジョスパンを支持しており、八二%が社会党に好意的である。UDFへは二二%、RPRへは十二%となっている。緑の党は、とりわけ若い、自由な、教養のある層において社会党との競争者として自らを誇示している⁽³²⁾。

選挙の分析を制度とか歴史によるだけでなく、投票は個人の行動に基づくのだから、その諸個人の態度に分析を向けることも重要である。そして個人は政治文化の担い手である⁽³³⁾。フランス社会における現存の政治文化の再編成には

附表 フランスにおける1999年支6月13日EU議会選挙結果（フランス本国）⁽³⁷⁾

有権者数	38,580,192	
投票者数	18,427,761	
有効投票	17,336,053	
		%/有権者数
棄権	20,152,431	52.2
白票，無効投票	1,091,708	2.8

リスト別	得票数	%/有効投票	議席数	リスト代表者
LO-LCR	906,839	5.2	5	ラギュエ
共産党	1,184,576	6.8	6	ユー
社会党-PRG-MDC	3,791,275	21.9	22	オランド
緑の党	1,691,006	9.8	9	コーン・バンディ
独立環境保護派運動	268,262	1.6		ヴェシュテル
「狩猟・釣り・自然伝統」派	1,194,378	6.9	6	サン・ジョセ
諸派	677,415	3.9		
新UDF	1,602,225	9.2	9	バイルー
RPR-DL	2,173,067	12.5	12	サルコジー
RFIE	2,278,911	13.2	13	バスクワ
FN	995,445	5.7	5	ルベン
MN	572,654	3.3		メグレ

三つの要因がある。第一に、個人主義化の深い進展と、伝統的集合体への忠誠に距離を置くことは、フランス社会と諸個人の政治選択に影響を与えている。第二に、国際化の進展によって、経済、社会、政治制度が開放に向かうことである。第三に、学歴水準の一定の高度化による文化の容である。学歴水準による文化の亀裂が、左翼右翼を問わず、「ヨーロッパ」や「外国人」について異なった見解を持った世界の対立へと切り裂いている。³⁴⁾

EU議会選挙は三人の勝者

と一人の敗者を作り出した。三人の勝者とはオランダを介したジョスバンであり、三二年前の栄光の日々から大喝采を受けて帰還したコーン・バンデイであり、限られた得票数であったにせよ、窮地を切り抜けたバスクワだった。サルコジー以上に敗者なのはシラクである。彼は、セガンの撤退によって不安定になり、バイルールの自立の決定によって無視され、バスクワによる邪魔によって愚弄されたことよって、自分が作ろうとした穏健右翼の連合の形成に失敗した。EU議会選挙から三年後の二〇〇二年には大統領選挙がある。それこそシラクが一番気にしていることである。彼はどのようにしてRPRを回復させ、彼のためになる多元的右翼を組織できるのだろうか？⁽³⁵⁾一九九九年のEU議会選挙はシラクの選挙民の芯の部分が腐食していることを示している。調査によれば、一九九五年のフランス大統領選挙第一回投票でシラクに投票した者のうち、今回のEU議会選挙でRPRのリストに投票した者は二八%しかない。二一%はバスクワ、十七%はバイル、十%は極右、六%は「狩猟・釣り・自然伝統」派に投票した。シラク大統領は世論調査では高支持を保っているが、彼の得票基盤の腐食は二〇〇二年の再選がうまくゆかないことを予言している。⁽³⁶⁾

- (1) Jérôme Jaffré, «Déficit européen, crise des droites. Les élections européennes de juin 1999 en France», *Pourvoirs*, No., 91, 1999, pp. 157-158.
- (2) 岩本勲「一九九九年欧州議会選挙とフランス諸政党の再編」『大阪産業大学論集』一一四号、二〇〇〇年、二頁。
- (3) Jaffré, op. cit., p. 159.
- (4) *Ibid.*, p. 163.
- (5) 岩本、前掲論文、九頁。
- (6) Jaffré, op. cit., p. 164.
- (7) *Ibid.*, p. 165.

フランスから見た一九九九年六月EU議会選挙

- (8) Ibid., pp. 165-166.
- (9) Piero Ignazi, Pascal Perrineau, «L'extrême droite en Europe : marginalité du néo-fascisme et dynamique de l'extrême droite post-industrielle» in Gérard Grunenberg, Pascal Perrineau, Colette Ysmal (dir.), *Le vote des Quinze*, Presses de Sciences Po, 2000, pp. 235-236.
- (10) Ibid., p. 236.
- (11) Ibid., p. 237.
- (12) Ibid.
- (13) Jaffré, «Déficit européen, crise des droites. Les élections européennes de juin 1999 en France», op. cit., pp. 166-167.
- (14) Ibid., p. 167.
- (15) Ibid., pp. 167-169.
- (16) Ibid., p. 169.
- (17) Ibid., pp. 169-171.
- (18) Ibid., pp. 171-172.
- (19) David Howarth, «France», in Juliet Lodge (ed.), *The 1999 Elections to the European Parliament*, op. cit., p. 133.
- (20) Jaffré, «Déficit européen, crise des droites. Les élections européennes de juin 1999 en France», op. cit., p. 173.
- (21) Ibid., p. 174.
- (22) Jérôme Jaffré, «Le Parti socialiste aux européennes : l'idéal et le réel», *Revue française de science politique*, Vol. 49, No. 4, 1999, p. 693.
- (23) Ibid., p. 694.
- (24) Ibid., p. 691.
- (25) 栗本 前掲論文' 十一頁。
- (26) Pascal Perrineau, «Les élections régionales, passé et présent», in Pascal Perrineau, Dominique Reynié (dir.), *Le vote incertain. Les élections régionales de 1998*, Presses de Sciences Po, 1999, pp. 22-23.

- (27) Ibid., p. 25.
- (28) Jaffré op. cit., p. 694. Id. «La dynamique de la droite et les limites de la remontée socialiste» *Pouvoirs*, No., 75, 1995, pp. 132-133.
- (29) Jaffré, «Le Parti socialiste aux européennes : l'idéal et le réel», op. cit., p. 694.
- (30) Jaffré, «Déficit européen, crise des droites. Les élections européennes de juin 1999 en France», op. cit., pp. 174-175.
- (31) John Gaffney, op. cit., pp. 91-92.
- (32) Jaffré, «Déficit européen, crise des droites. Les élections européennes de juin 1999 en France», op. cit., p. 175.
- (33) Pierre Brechon, Annie Laurent, Pascal Perrineau, «Introduction», in Pierre Brechon, Annie Laurent, Pascal Perrineau (dir.), *Les cultures des Français*, Presses de Sciences Po, 2000, p. 12.
- (34) Ibid., pp. 13-14.
- (35) Jaffré, op. cit., pp. 176-177.
- (36) David Howarth, op. cit., p. 134. p. 137, note. 21.
- (37) Jaffré, op. cit., p. 158.